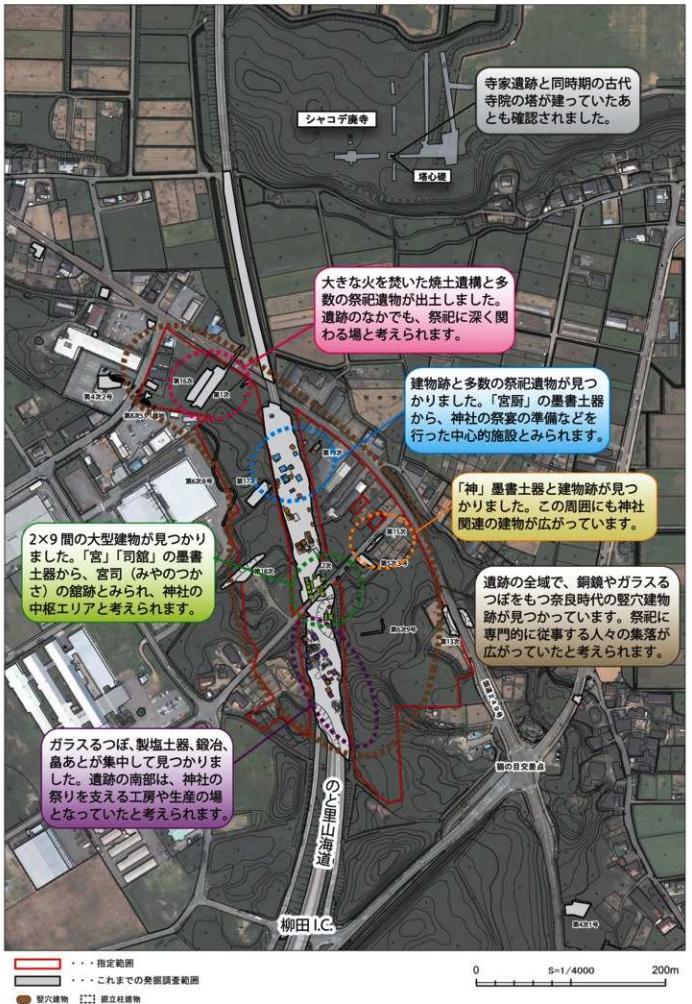


古代の寺家遺跡



平成 29 年度 寺家遺跡整備基本計画策定事業

史跡 寺家 遺跡を 「知り、守り、伝える。」

～遺跡を知り、地域に生かす史跡の整備を考える～

羽咋市では、国指定史跡「寺家遺跡」の価値を保存・活用するための史跡整備に向けて、基本計画策定事業を進めています。

寺家遺跡は、古代の気多神社と神まつりに関連する重要な発見があった遺跡で、私たちの住む羽咋の祈りの歴史を解明するために欠かせない重要な遺跡です。

この遺跡を、未来の羽咋へどのように「守り」「伝えて」いくべきでしょうか。遺跡を正確に「知り」、地域に生きる史跡の整備を考えたいと思います。

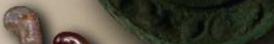


写真 寺家遺跡出土品
海獸葡萄鏡 勾玉

（石川県立歴史博物館蔵）

寺
家
遺
跡
守
り
傳
え
る

寺家遺跡出土
神祇開祖墨書き
「神」字模造「天」字
「地」字模造「日」字

羽咋市教育委員会

〒925-0027 石川県羽咋市鶴多町鶴多 38-1
羽咋市歴史民俗資料館内（文化財室） ☎0767-22-5998



上空から見た気多大社と「入らすの森」



国指定重要文化財 気多神社拝殿



平国祭（おいでまつり 3月）
気多大社の祭神が能登地域を6日間かけて巡回する行幸祭。地元では、「寒さも気多の“おい”で」と言われ、春告げの祭りとしても知られる。



蛇の目神事（4月）
祭神が邑知瀬に住む大蛇を退治した伝承に基づく祭礼。オロチの目玉に見立てての矢矢で射ち、槍で貫き、太刀でとどめを刺す。



蠟燭（国宝無形文化財 12月）
深夜の行幸に蠟を放ち、その動作で吉凶を占う古式の特殊神事。

延喜式内名神大社、能登國一宮。古代より北陸道沿岸地域の鎮護として信仰を集める。

古經起によれば、祭神の大己貴命（大国主命）は、出雲から三百余神を引き連れ來臨したと伝え、当地の弥生時代以来の日本海交流との深い関わりを物語る。

社殿背後の鬱蒼と茂る広大な鎮守の森は「入らずの森」とよばれる禁足地で、神職も奥宮祭祀以外では立ち入りらない。タブノキをはじめとする常緑の原生林としても学術的にも貴重で、人々の信仰により守られる神宿る森である。

「平国祭」「蛇の目神事」「鶴祭」など、古式の特殊神事を伝えることでも知られ、いにしへの祈りと祭りを今に伝える古社である。

奈良・平安時代を中心とする古代祭祀遺跡で、海岸砂丘に営まれた砂丘の遺跡である。

多数出土した古代の神まつりの道具（祭祀遺物）、竪穴建物群や掘立柱建物群などの遺構、墨書き土器「宮厨」、「神」「宮」「司」「司館」は、古代の神社とこれに從事した人々や施設のようすを物語る。また、祭祀地区とよばれるエリアで発見された「大型焼土遺構」は、その規模・内容・特徴とともに他に例がなく、この遺跡で行なわれた古代祭祀に深く関わる遺構である。

これらの考古学的成果は、文献史料の気多神社関連記述と年代的、内容的に整合性が高く、気多神の古代のようすを考古学的に知ることがができる貴重かつ重要な遺跡である。

気多と大社 寺家遺跡 国史跡

現在に息づく祈りとまつり

文献史料の古代気多神社

748年（天平20年）
越中国司大伴家持が都内巡行
羽咋を訪ね氣多神宮を参拝
765年（天平寶慶1年）
氣多神社に幣帛使、封戸10烟

770年（宝亀元年）
氣多神に幣帛使
784年（延暦3年）
氣多神が從三位に昇叙

804年（延暦23年）
氣多宮司は觀音につき神祇官が定める

834年（承和元年）
氣多大神宮の權宜と祝に把笏を許す

859年（貞觀元年）
氣多神の神體が從一位に昇叙
氣比・氣多両社に奉幣使

寺家遺跡の考古学的成果

8世紀前半
竪穴建物集落が出現。
銅鏡・ガラス器のつぼ等をもつ
祭祀遺物の集落（神戸集落）
が形成される。

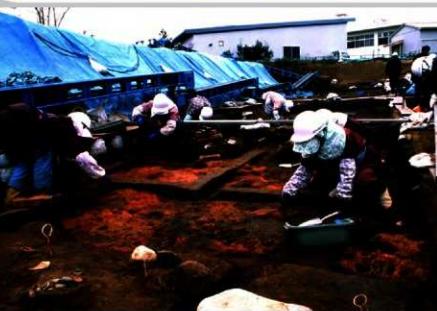
8世紀後半
竪穴建物集落が掘立柱建物に
建て替え。神戸集落の再整備。
祭祀地区では大型焼土遺構。

9世紀前半
北部建物群「宮厨」の形成。
遺跡南部には製塩・鍛冶・
窯などの生産域が所属。
官社・官人には伴う分業的
再編整備が進む。

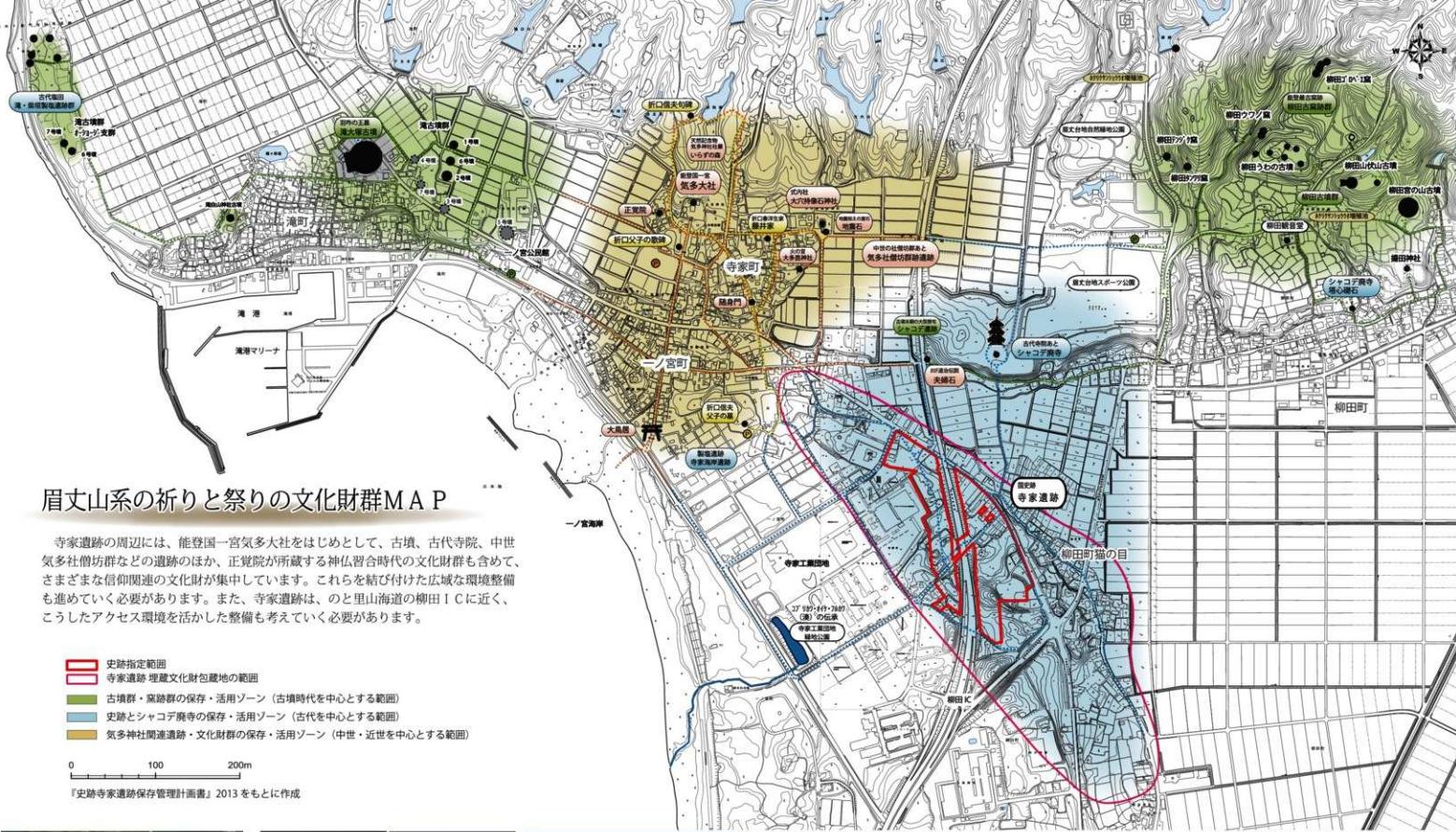
9世紀後半
中央建物群「宮司館」の形成。
祭祀地区では土器・祭具集積。
官社化・厚遇措置のピーク期。



古代神まつりの道具
寺家遺跡では、8・9世紀の銅鏡、銅鈴、瑠璃、皇朝鏡、帶金具、鐵鏡、鐵鏡、鎌刀子、直刀などの金属製祭具のほか、勾玉、三彩、綠釉陶器など多種多彩に出土しており、神まつりに惜しまなく貴重な品々が奉獻された様子をうかがい知ることができる。



砂丘上に粘土を貼り床し、大規模な火を焚いた痕跡が発見された。非常に強く焼けているが、表面には灰や灰などが残っていなかった。燃焼後に掃除が行われたとみられ、清浄を保つ意識が読み取られる。その規模・内容とともに他に無い特殊な遺構である。



淡大塚古墳（能登最大規模の古墳）と
淡1号墳、2号墳、6号墳



正覚院 気多社古縁起と阿弥陀如来坐像（重文）



式内大穴持像石神社



折口信夫父子の墓



柳田シャコデ寺
発見された塔心礎石の穴のあと



柳田町善正寺
柳田シャコデ寺の塔心礎石

整備を考えるシンポジウムを開催しました

寺家遺跡の価値、整備方針を探る

~専門家らが意見交換~



平成29年11月5日、コスモアイル羽咋を会場に、寺家遺跡の整備を考えるシンポジウムを開催しました。午前は遺跡について学ぶ「知る編」、午後は遺跡の整備を考える「生かす編」として、多彩な講師陣から充実した内容の講演がありました。パネリストセッションでは、さまざまな意見・アイデアを共有する場となりました。

午前の部「遺跡を知る編」



國學院大學教授
笛生 衛 (さそうまこと)

特別講座「祭祀考古学研究から見た史跡寺家遺跡の価値」
—寺家遺跡と古代の氣多神社—神觀・祭祀の実態と祭祀遺跡—

寺家遺跡から発見されたさまざまな成果を再検討し、古代の氣多大社の性格や位置づけ、神まつりの内容に迫りました。

気多大社は、日本海に面し邑知瀬を擁する重要な港湾であった古代能登の羽咋に「坐す（ます）」神であり、国家的な祭祀（神まつり）の対象とされ、調査成果からその古代の景観の復元に迫りました。

午後の部「遺跡を生かす編」



文化庁記念物課主任調査官
佐藤正知 (さとうまさとも)

文化庁調査官が伝えたい史跡の整備

「史跡をどのように生かすか —羽咋への提言—」

全国の史跡整備事例に精通する文化庁記念物課主任調査官の立場から、寺家遺跡の整備やその方向性に対する考え方を示しました。

寺家遺跡の価値を生かすためには、気多大社を中心置いて考え、寺家遺跡や周辺の関連文化財を語っていくべきと述べ、羽咋の歴史を語るうえで欠かせない気多大社の重要性を強調しました。



金沢学院大学教授
小嶋芳孝 (こじまよしひさ)

寺家遺跡研究から見た羽咋

「能登、羽咋、寺家遺跡。史跡整備への想い。」

小嶋教授は、1978年の遺跡発見時から発掘調査を担当し、調査研究を続けています。40年前の調査で撮影したカラースライド写真とともに、調査の現場でその手に感じたメッセージを伝えるとともに、東北や北方世界、大陸や朝鮮半島も含めた日本海を取り巻く古代社会における能登と羽咋の位置づけから、寺家遺跡の歴史的価値を説明しました。

先行事例に学ぶ—活用の現場から—

「古代の西都、太宰府の文化財を活かしたまちづくり」

古代日本のアジアへの玄関口として、数多くの重要な古代遺跡がある太宰府市の文化財を活かしたまちづくりの先行事例を紹介しました。

市民に身近な文化遺産が持つ地域ならではのストーリーを市民が認定する市民遺産制度や太宰府まるごと博物館構想など、史跡を見守り「育てる」活動につなげる具体例を提示しました。



太宰府市教育委員会
井上信正 (いのうえのぶまさ)

パネリストセッション



パネリストセッションのようす

寺家遺跡の史跡整備において、神に捧げる祈りや儀式という「カタチのないもの」を、どのように表現して伝え、理解してもらうか。寺家遺跡の最大の特徴である一方で、非常に難しい課題です。各パネリストからは、模型や映像制作、広域な景観整備の重要性など、さまざまな方法が話し合されました。また、寺家遺跡の「砂丘に埋もれた遺跡」というもう一つの特徴を、どのように表現し伝えるかという議論では、砂丘の土層のようすをモデルにした「砂丘ケーキ」を作るアイデアもありました。遺跡をお菓子や食品で食べながら理解できれば、文化財が楽しく身近になります。



羽咋市教育委員会
中野知幸 (なかのともゆき)

担当者に聞く！！～寺家遺跡を100年先に遺すには～
寺家遺跡を地域に「生きる」史跡にするために



寺家遺跡は、1978年に能登有料道路の建設関連工事で発見されて40年になります。この間、多くの人がこの遺跡に関わり、史跡指定による保存を目指して調査研究を主体に価値の整理を進めてきました。遺跡を守り・伝えるのは人の力に他なりません。これからは公開普及事業も行って、史跡整備を通して保存と活用を両立させ、100年先の羽咋に生き続ける遺跡を目指します。そのためには、世代を超えて多くの人が遺跡に関わり続け、協働で育てていく仕掛けと仕組みが必要です。この史跡整備を通して、市民のみなさんが遺跡に関わり、羽咋の歴史が楽しくなるような場づくりを進めたいと思います。ご理解・ご協力をお願いいたします。